



教皇様の聲

12

260号

Libreria Editrice Vaticana, Citta del Vaticanoの転載許可済 2001

主のご降誕と新年のお慶びを申し上げます。

祈り、断食、施し

〔日曜日の正午、聖ペトロ広場でのお告げの祈りの前に、教皇様は次のようにお話しされた。〕

1 国際情勢は、気掛かりな緊張状態のために不穏な状況に置かれています。私たちは、これほど多くの兄弟姉妹たちが受けた、そして今も受け続けている過酷な苦しみを見過ごすわけにはいきません。9月11日のテロ攻撃では罪なき人々が何千と亡くなりました。また、家を捨て未知の地へ向かわなければならず、時には悲惨な死に向き合うことを余儀なくされている人も数えきれません。女性、老人、そして子供たちが寒さと飢えのために死の危険にさらされています。

いまだにテロリズムの脅威にさらされ信じられないことが起こる世の中であって、神に叫びを上げる必要性を感じます。困難が乗り越えられないもののように思えば思えるほど、また将来の見通しが不明瞭であればあるほど、私たちは一層粘り強い祈りによって、神に相互理解と調和と平和の賜物を乞い求めなければならないのです。（…）

12月14日、カトリック者は、平和のために祈り、断食、施しをしましょう

2 祈りは、断食と施しを伴う時、より強力なものとなることを私たちは知っています。旧約聖書はこのことを教え、キリスト者たちは初期の時代からこの教えを受け入れ実践してきました。それは特に待降節と四旬節に行われます。イスラム教の人々は、ちょうどラマダン（断食と祈りのために捧げられた1ヶ月）を始めたところです。そして、私たちキリスト者も間もなく待降節を迎えます。「平和の君」の誕生を祝うクリスマスに向かって、自らを祈りのうちに整えるためです。

このふさわしい時に、カトリック者の皆さんが、来たる12月14日を断食の日とするようお願いしたいのです。この世界に正義に基づいた安定した平

和がもたらされるように、またこの世界をかき乱す幾多の争いに対して適切な解決が見出せるように、心から神に祈りましょう。断食で捧げた犠牲が、貧しい人々、特に今テロリズムと戦争による苦しみを受けている人々に届きますように。

2002年1月24日、アッジジでの祈りの日に向けて

2002年1月24日には、宗教の代表者を世界からアッジジに招き、対立を乗り越えて真の平和を推進するため共に祈りを捧げる望みを表明しようと思っています。特に、宗教を対立や憎しみ、暴力の原因にすることなどあってはならないことを、キリスト者とイスラム教徒が共に世界に向かって宣言できることを願っています。歴史的な瞬間となるであろうこの日、平和への意思表示を目にし、希望の言葉を耳にすることが人類には必要です。

15年前にも平和のために祈りの集いと呼び掛け、その年の10月アッジジで次のようにお話ししました。「地上から天国に向かって一致して祈ることが急がれています。世界の運命は全能の神の手の中にあります。平和という偉大な賜物を願い、人類の真の発展に役立つあらゆる真剣な努力に必要な条件を整えてくださるよう共に請い求める必要があります。」

平和の元後に、真理と愛の力を乞い願いましょう

3 幸いなおとめマリアが母として導いてくださるようこの願いをゆだね、また平和を実現させるための努力を支えてくださるよう祈ります。

平和の元后マリア、今不安をもたらしている新たな挑戦に対して、真理と愛の力で応えることができ

るよう助けをお与えください。多くの人々の平穏な生活がかき乱されています。私たちがこの困難な時を無事に乗り越え、ためらうことなくいつでもどこ

にいても真の平和を築くことができるよう力をお与えください。
(2001.11.21)
(京都在住小杉氏の訳を使わせていただきました。)

神のあわれみ

[水曜日の一般謁見で。詩編50(51)についての考察。]

1 今日、詩編作者の非常に有名な祈り「ミゼレレ」を考察しましょう。これは熱心な祈りで、悔い改めの詩編としてよく使われるものでもあり、罪と赦しの賛歌、罪と恩恵についての深い黙想でもあります。時課の祈り(教会の祈り)では毎週金曜日の朝の祈りでこの箇所を祈ることになっています。何世紀もの間、忠実なユダヤ教徒やキリスト者の心はこの祈りを天に上げて痛悔し、またあわれみ深い神に注がれる希望を示してきました。

ダビデの悔い改めとその後の罪人たちが得たもの

ユダヤ教は伝統的に詩編50(51)をダビデの言葉とします。ダビデはバト・シェバとの姦通とその夫ウリアを殺害したことについて、預言者ナタンから厳しい言葉で悔い改めを求められます。(詩編50(51),1-2、サムエル11-12参照)しかしながら詩編50(51)は、その後数世紀の間に多くの罪人によって深められました。預言者エレミヤとエゼキエルの教えによると(詩編50(51),12、エレミヤ31,31-34、エゼキエル11,19,36,24-28)、罪人たちは、あがなわれた人間のペルソナに注がれる「新しい心」と神の「聖霊」という主題を回復したと伝えられています。

原罪

2 詩編50(51)は2つの輪郭を描いています。まず罪の暗闇から始まりますが(3-11節参照)、人間とは存在が始まる時からその暗闇に置かれるものです。「わたしは咎のうちに産み落とされ、母がわたしを身ごもったときも、わたしは罪のうちにあったのです。」(7節)キリスト教神学はこの箇所を原罪の教えの定義として選んでいないものの、この節が教義の明確な表現と一致しているのは明らかであり、人間のペルソナが生まれ持つ倫理面での弱さという深い側面を表わしています。詩編50(51)の最初の部分は、神の前で罪の分析を行っているかのようです。3つのヘブライ語の言葉が罪を定義するために使われますが、この罪という悲しい現実人間の自由を悪用することから来るものです。

罪に対する3つのヘブライ語の言葉

3 ヘブライ語の「ハッタ」という1つ目の言葉は、文字通りには「的に達しない」という意味ですが、罪は根本的な目的地である神から私たちを遠ざけ、結果的に隣人からも遠ざける過ちであることを示しています。

2つ目のヘブライ語「アウォン」は「ねじれ」や「ゆがみ」というイメージを呼び起こす言葉です。罪はまっすぐな道からはずれることであり、転倒、ゆがみ、善と悪のひずみです。イザヤは次のように言います。「災いだ、悪を善と言ひ、善を悪と言うものは。彼らは闇を光りとし、光を闇とし」(イザヤ5,20)このことから聖書は、回心を、行路を戻し正しい道に「戻ること」(ヘブライ語ではシュブ)であると指し示すのです。

詩編作者が罪について用いる3つ目の言葉は「ペシャー」です。これは、統治者に対する民の反逆であり、神と人類の歴史の計画に対する表立った挑戦を示しています。

神の救いの正義は罪人を造り直す

4 しかしながら、罪人が罪を告白するなら、神の救いの正義はすぐに人間を根底から清めます。詩編50(51)の2つ目の輪郭までやってきました。ここからは光を出す恩恵の箇所に入ります。(12-19節参照)罪の告白によって、祈る人に神が働かれる光の地平線が開かれます。主は単に否定的に行動して罪を取り除くだけでなく、生命を与える聖霊によって罪人に活力をお与えになります。主は人間のペルソナに新しい純粋な「心」つまり新しくなった良心を与え、神をお喜ばせる澄んだ信仰と崇拜の可能性を開かれます。

オリゲネスは神の治療法について次のように言いました。主はそれをキリストの言葉と癒しによって行われます。「神は賢明に混ぜられた薬草から肉体のために薬を用意されましたが、同じように靈魂のためには神が注ぎ込んだみことばを聖書のあちらこちらに散りまいて薬を用意されたのです。神は他にも治療法をお与えになりましたが、それは主の原型と言えます。主はご自分について『医者が必要なのは健康な者ではなく病人である。』と言われます。主は優秀な医

おわび・・先月号で、二〇〇二年一月より休止とすべきところを、二〇〇一年一月と記してしまいました。ご迷惑をおかけして申し訳ありません。「教皇様の聲」はしばらく休止いたしますが、これまでご購入くださった皆様には心よりお礼申し上げます。「教皇様の聲」一同

者であり、あらゆる弱さや病気を治すことができるのです。(オリゲネス「詩編についての説教」)

罪の感覚：痛悔とあわれみの懇願

5 豊かな内容を持つ詩編50(51)には、一つ一つ注意深く解釈する価値があります。毎週金曜日の朝の祈りでこの箇所を祈る時、そのように注意深く味わうことにしましょう。この偉大な聖書の祈願を概観したことで、神を信じる者の日々の生活に広がる根本的な要素を知ることができました。特に、詩編50(51)には罪に対する鋭い感覚がありました。罪は自由な選択と考えられ倫理的・神学的には否定的な意味を伴っています。「あなたに、あなたのみわたしは罪を犯し、御目に悪事と思われることをしました。」(6節)

詩編50(51)には、回心の可能性という生き生きとし

た内容も描かれています。心から悔い改めた罪人は(5節参照)、みじめにも裸で神の御前に赴き、御前から退けないでくださいと懇願します。(13節)

最後に、詩編50(51)では、神の赦しという深い確信が罪人を「ぬぐい、洗い、清め」ます。(3-4節参照)またその確信によって、新しい靈魂、舌、唇、心に変えられた新しい被造物となるのでした。(4-19節参照)「たとえ私たちの罪が夜のように黒くとも、神のあわれみは人間の惨めさより大きなものです。必要なことは一つだけで、罪人は心の扉を半開きにさえすれば良いのです。後は神が開いてくださるでしょう。あらゆるものは神のあわれみで始まりそして終わります。」聖ファウステーナ・コワルスカはこのように記しています。(M.Winowska,「神のあわれみの像、シスター・ファウステーナの言葉」 (2001.10.24)

バチカンからのニュース

2001年10月16日バチカン 教皇選出記念

ヨハネ・パウロ2世はこの日、教皇選出23年目を祝った。特に催しはなかったが、一つの祝日としていつものように忙しいスケジュールをこなされた。

司教シノドスは教皇選出記念を祝う大きな拍手で一時的に中断した。シノドスの議長を務めるコスタ・デ・マルフィルのベルナルド・アグレ枢機卿は参加者を代表してあいさつし、ラテン語で祝いの言葉を告げた。

1981年の銃撃や大きな手術(1992年腫瘍の摘出、1994年大腿骨の骨折、1996年虫垂炎)にもかかわらず、現在81才の教皇様はこれまでに様々な計画を進めてきた。

教皇様はカザフスタンとアルメニアから9月27日に戻られた。同行した60人の報道関係者は帰りの飛行機の中で教皇様と握手をしたり一緒に写真を撮ったりと教皇様とのひとときを過ごすことができた。旧ソビエト連邦への訪問から戻る飛行機での出来事だった。その日は突然の日程変更や気温の変化もあったが、5、6回の公的行事をこなされていた。

ニューヨークタイムズの通信記者はその日のことをこう記している。「アルメニア滞在中の教皇様について大変な疲労が報道されていたが、飛行機の中で教皇様は生き生きとした様子でユーモアの精神で、フランス語、英語、スペイン語からイタリア語まで自然にお話されていた。」

来年の8月カナダのトロントで世界青年大会が行われるが、これは2000年の8月以来待ち焦がれられてい

る大会である。

バチカンの通信記者によると、まだ公的なものではないが2002年にはその他にもいくつかの訪問が計画されているということである。3月にはブルガリアを訪問することになっており、他にも旧ソビエト連邦諸国(正教会、イスラム国家を含む)やポーランド訪問も計画されている。

教皇様は記録について話すことを好まれないが、23年という数字は教皇在位期間としては最高である。教皇様はイタリア国内以外に128の地域を訪問され、地球の反対側にも3度訪問された。回勅、説教、規約、使徒的書簡など100以上の文書を書かれている。その中には、これからの数十年間のかじ取りとなるであろう「カトリック教会のカテキズム」や「教会法典」にも携わっている。8回の枢機卿会議、15回のシノドスを行い、452人を列聖し、1172人を列福なされた。バチカン巡礼者のために1000回以上の一般謁見を行い1600万以上の信者を迎えた。さらに、イタリアを訪れた司祭の訪問を138回受け、720以上の教区や団体をローマから招いている。

2001年10月22日 列福された夫婦について

10月21日の日曜日、一組の夫婦がヨハネ・パウロ2世によって祭壇上の栄光にかけられた。夫婦が列福されるのは今回が初めてである。聖性が聖職者だけのものでないのは、3千年期にさしかかった教会にとって明白なことだが、列福列聖調査請願者パオリノー・ロッシ神父がそのことを確認した。

パオリーノ・ロッシ神父は、列聖のための文書を列聖省に提出したが、この文書は、ルイジ・ベルトラーメ・カトロッチ(1880-1951)と妻のマリア(1884-1965)の諸徳の英雄性を証明するもので、二人の歩みが大まかに記されている。しかしながらこの夫婦は特別な偉業を成し遂げたわけではない。

マリア・ベルトラーメ・カトロッチは教育者で、教育をテーマにした著作を残している。様々な団体(カトリック・アクションやボーイ・スカウト等)に携わっていた。ルイジ・ベルトラーメ・カトロッチは優秀な弁護士であった。二人には、司祭になったフィリッポ(1906)、修道者のステファニア(1908-1993)、司祭のチェサーレ(1909)、末っ子のエンリケッタ(1914)という4人の子供がいる。

列福列聖調査請願者パオリーノ・ロッシ神父は言う。「ルイジとマリアは外面的に何か『特別なこと』をしたわけではありません。しかし二人が生きたことは特別でした。二人は確かにキリスト者でした。キリスト者としてふさわしく忠実に生きただけです。神のご計画を受け入れ尊重していました。二人はお互いに、また子供たちや周囲の人々に愛情をこめて接し、善と正義をもたらしました。二人は希望の人で、この世の現実には意味があることを知っており、いつも天国に目を向けていました。」

パオリーノ・ロッシ神父は言う。「新しく福者となった二人は世界に希望と慰めのメッセージを告げキリスト者の家庭を支えるでしょう。今日キリスト者の家庭は多くの問題に苦しめられ、根本的な価値観、考え方、秩序が脅かされています。」

今回の列福にはその他にも特別な意味がある。聖人として認めるためには何らかの奇跡が必要とされるが、この夫婦の列福のために認められたのは、二人が共に仲介したとされる一つの奇跡であった。パオリーノ・ロッシ神父によると、その奇跡はジルベルト・グロッシ氏が受けたものである。グロッシ氏は若い神経外科医であるが、研修医の時代、ベルトラーメ・カトロッチ家で二人の著作を分類する仕事をしていた。パオリーノ・ロッシ神父は言う。「グロッシ氏は骨の病気の治癒を神に祈り、二人の仲介を求めました。氏はその病気のためにしばしば動けなくなるほどだったのです。」「二人の『共同の仲介』を認めるにあたって、夫婦は人間的に一体であるだけでなく、霊的にも一体であることを神学者たちが強調したといえるでしょう。」パオリーノ・ロッシ神父はこう締めくくった。

2001年10月31日 教皇様司祭叙階55周年記念

10月16日に23回目の教皇在位記念を祝ったばかりの教皇様は11月1日に司祭叙階55周年を祝うが、これは歴代教皇の中でも最高記録である。1946年の11月1日26歳の時にカール・ヴォイティワはポーランドのクラクフで叙階の秘跡を受けた。その後、更に勉強を続けるためローマのアンジエリクム大学に進む。

初ミサは、ワプエル大聖堂の中にある聖ベルナルドの小聖堂で行われ、この日、亡くなった両親と兄弟のために三度ミサを捧げた。この大聖堂にはポーランドの歴代王たちが葬られている。

博士課程を修了後、1948年に司祭としての最初の任務を受け、クラクフの中心にあるニエゴピエという貧しい地方の小教区に赴く。初めの6ヶ月は水道も排水溝も電気もない小さな家で、もう一人の司祭との共同生活を送った。

ヨハネ・パウロ2世は様々な記録を更新した。10月21日の夫婦の列福の前に、すでに1274人を列福したが、その中の1018人は殉教者、254人は証聖者である。11月4日にはさらに新たな福者を宣言する。これまでに452人を列聖し、その中の401人は殉教者で51人は証聖者であった。23年間教皇を務めるヨハネ・パウロ2世は、使徒的訪問のため95回海外へ赴き、128カ国を訪問された。イタリア国内では140の場所を訪れた。7回ずつ訪れたポーランドとアメリカ合衆国への訪問が最も多く、フランスには6回、スペイン、ポルトガル、ブラジル、メキシコには4回ずつ、また日本にも訪問されている。使徒的訪問のためイタリア国外での滞在時間は552日10時間25分になる。8回の枢機卿会議を行い、合計201人の枢機卿たちが集まった。現在、枢機卿会は179人を備え、その内130人に選挙権があり49人は80才以上である。179人の枢機卿の内、159人はヨハネ・パウロ2世が任命し、その内121人には選挙権がある。枢機卿全員参加の会議を6回召集し、最も最近のものは今年の3月に行われている。カトリック教会には4400人以上の司教がいるが、その内3337人はヨハネ・パウロ2世が任命した。それは全体の67%に上る。

現在バチカンEU(ヨーロッパ連合)やマルタ共和国以外に172カ国と国交があり、更にロシア連邦やパレスチナ解放機構との関係も広がっている。

(‘zenit’より)

「教皇様の聲」ヨハネ・パウロ二世教皇の説教、書簡、講話等を解説なしにそのまま伝える月刊紙

■定価：送料とも一部186円 ■12ヶ月分各一部ずつの場合：送料とも2,087円(税込)

詳しくは、精道教育促進協会までお問い合わせ下さい。

財団法人■精道教育促進協会 〒659-0093兵庫県芦屋市船戸町12-6 TEL. 0797-31-3452

FAX. 0797-31-3448 振替口座：01130-8-72393 財団法人 精道教育促進協会